

平成24年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	24K01	氏名	平野 公隆
研究主題 —副主題—	通常の学級における感覚・運動アプローチのあり方		
所属校	品川区立鈴ヶ森小学校	派遣先	創価大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>「授業中に姿勢が崩れてしまう」、「やる気が感じられない」、「不器用である」、「整理整頓が苦手」など、教室においてこのような児童が見られる。これまでこのような児童は、知的な障害がないことが前提とされているので、「どうしてできないのか」、「何度言えば分かるのか」などと繰り返し叱られてしまうことが少なくなかった。</p> <p>何度も同じことを言われても自分で解決できない、丁寧に教えているのに効果が見られないという児童への対応が課題となる。</p> <p>アメリカの作業療法士エアーズは、LDやアスペルガー症候群などの児童へのリハビリテーションの技法を「感覚統合療法」として体系化した。エアーズは「感覚統合」について「脳に入ってくる様々な感覚情報を、目的に応じて整理し、秩序だったものに構成すること」と述べている。</p> <p>今では一つの通常の学級に数名は支援を個別に要する児童が在籍すると言われている。そこで、次のような仮説を立て、研究を進めることとした。</p> <p>「通常の学級において感覚統合に基づいた実践を個別の支援としてではなく、全体指導として取り組むことで、支援を要する児童に限らずどの児童にも効果が生まれるのではないか」</p>
II 研究の方法	<p>1 アセスメントの実施</p> <p>小学校第1学年を対象とした感覚・運動アプローチを進めることとした。アセスメントは、療育施設「たすく」代表の齊藤宇開氏と松井匠氏（作業療法士）と連携し、児童の実態を専門的な視点から助言してもらうようにした。</p> <p>2 感覚・運動プログラムの作成・実施</p> <p>体育科授業での実践、週に3回の朝の体操、放課後の「すまいる体操」の三つの場で取り組む感覚・運動プログラムを作成し、実施した。</p> <p>3 評価</p> <p>タイムサンプリング法を用いて①足や上体の姿勢が安定していない②他の人の話に注意が向けられない（主に視線）③指噛み、物くわえをするの3点について児童一人一人の回数を記録することとした。</p> <p>さらに、観察として、担任やかかわりのある教員にアンケートやインタビューをし、児童の変容をまとめることとした。</p> <p>4 専門家との連携</p> <p>療育施設「たすく」の齊藤宇開氏と松井匠氏より感覚・運動アプローチについて指導・助言を賜り、本研究を進めた。</p> <p>健康体操指導士かつラジオ体操公認指導者の協力を得て、「鈴ヶ森メイト体</p>

	<p>操」を作成した。</p>
<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>1 タイムサンプリングの結果から</p> <p>項目①「足や上体の姿勢が安定していない」については、月曜日に調査した結果において、3～4回又は5回以上の記録がついていた児童の人数に減少傾向が見られた。しかし、木曜日に調査した結果には顕著な変化は見られなかった。</p> <p>さらに、抽出児のデータをみると、月曜日の調査結果からはA児、B児、C児の3名とも減少傾向になった。木曜日の調査結果に関しては、開始から回数が増えたものの後半にやや数値が上がる傾向が3名ともみられた。</p> <p>項目②「他の人の話に注意を向けられない（主に視線）」については、月曜日では、初回の記録こそ0回の児童は7名（31%）にとどまったが、2回目以降は70%を超える児童が0回となっていた。木曜日については、初回の記録において0回の児童は7名（30%）であったのに対し、最終には15名（66%）の児童が0回となっており、0回の児童はほぼ倍増していた。</p> <p>抽出児のデータを見ると、A児は月曜日と木曜日ともに減少傾向が見られた。B児は、元々この行動があまり見られず、調査期間中も大きな変動は見られなかった。C児については日によって差が見られ、3～4回を記録することもあった。</p> <p>項目③「指しゃぶり、物くわえをする」については、月曜日の調査から、少しずつ行為の見られる児童が増えた。木曜日は、日によって0回の児童数に変動が見られた。3回以上を記録する児童は一人もいなかった。</p> <p>抽出児のデータをみると、A児は、元々この行為があまり見られない児童であり、調査による変動はあまりなかった。B児は、月曜日の調査からはあまり行為が見られなかったが、木曜日は観察者が代わることによって数値が大きく異なる結果が出た。C児は、月曜日において観察者によっては4回という多めの回数が記録されたが、平均的には1回程度の記録での変動はあまり見られなかった。木曜日については、10月18日の記録に観察者が代わることによる変動が見られた。</p> <p>2 観察（担任へのアンケートより）</p> <p>今回の取組に効果があったと、担任3名から回答があった。具体的には、「姿勢がよくなった」、「気分よく一日が始められる」、「正しい体の伸ばし方や動かし方が意識してできるようになってきた」などが挙げられた。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>数値として顕著に表れなかったり、アプローチの実施早々に数値の向上が見られたりするなど、結果からは確かな検証はできない。これは、実践期間の不十分さが考えられる。また、全体指導で取り組むプログラムを作成し指導してきた。しかし、児童一人一人の課題は異なる。この課題を解決するためには個別のアプローチが効果的であると考えられる。</p> <p>しかし、今回の取組が全く効果の無いものと断定することはできない。抽出児の結果を見ると、姿勢保持に関しては改善傾向が見られ始めるなど、即効性が現れる児童もいることが分かる。</p>